編　集　後　記

『キリスト教学』第 64 号を立教大学キリスト教学会の会員、また関係者の皆様にお届けできたことを心より嬉しく思います。本年は、この世界を覆った疫病がようやくわずかながら落ち着き、少しづつではありますが日常が戻ってきたように感じられる一方で、ロシアによるウクライナ侵攻と泥沼化する戦争、またその影響による世界的なエネルギー価格の高騰で、不安な日々はまだまだ終わりそうもありません。そのようななかで危機を叫び、不安を煽るのではなく、数千年に渡って人間が営んできた学問とその研鑽をもって、平静さを保ちつつ日々過ごしていきたいものです。そうした学問や教育の成果の一部を本誌では紹介することができました。

さて、本号の構成は、論文 1 本、研究ノート 1 本、大会講演 1 本、書評 5 本、2021 年度修士論文要旨 2 本、2021 年度課題研究報告書要旨 3 本、2021 年度優秀卒業論文要旨 2 本となっております。論文は、本研究科特任准教授の金迅野先生によるもので、ヘイトについての非常に重要な考察となっております。阿部善彦先生による研究ノートは、吉満義彦（1904–1945）の著作に焦点をあて、日本における「カトリシズム」の問題を扱った二部構成の力作です。第二部は次号に掲載される予定です。本研究科特任教授の米沢陽子先生の講演録は、「ドイツオルガンの父」と呼ばれるザムエル・シャイト（Samuel Scheidt, 1587–1654）の音楽の着想の源泉を声楽作品にみいだす意欲的なものです。いずれの研究も今後さらなる発展を期待できることでしょう。また、1982 年から 1998 年までキリスト教教育の分野で数多くの学生を指導された坂口順治先生の追悼文を本学名誉教授の福山清蔵氏に執筆していただきました。

最後にはなりますが、本号の編集作業にご尽力くださった、本研究科教育研究コーディネーターの依田郁子氏に心より感謝を申し上げます。氏のサポートがなければ、本誌の刊行は実現できなかったといっても過言ではない

でしょう。次号もさらなる誌面の充実を目指し、本学科・研究科での研究や教育の成果を皆様とおわかちできるよう精一杯努めてまいります。これからも皆様のご支援とご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2022 年 12 月

編集責任者　加藤　喜之